～～～

漢字あれこれ（その16）

対面リーディングボランティア　澤井（さわい） 稔（みのる）

勝手読み

　ちょっと借りて来て新しい読みが生まれました。それなりに根拠が有ろうかとは思いますが、その事は今となっては大事な意味を持たない。そんな言葉が有ります。
　代表的な例は「姉妹・兄妹・姉弟・弟妹」で、“きょうだい”と読まれることが有ります。辞書で“きょうだい”を引くと「兄弟」の表記しか有りませんが、世間ではいつの間にか用例が広がって使われる様になって来ました。
　以下、少し拾ってみましょう。

①母娘の絆=おやこのきずな　他に「父娘」も使われます。

②父子鷹=おやこだか　子母沢寛の小説の題名で映画にもなりました。

③雀士=じゃんし　麻雀のプロ。　麻雀はもともと「麻将」と書いたとか。

④お酒の壜=おさけのびん　「壜」の元の読みは「タン」または「ドン」ですが、いつのまにか「瓶」と共に使われる様になりました。

⑤蟹缶=かにかん　「缶」の元の読みは、音読みが「フ」、訓読みが「ほとぎ」です。「罐」からこちらの使い方に移ってきました。

⑥二浬=にかいり　「海里」は航海の距離を表す単位で、1852メートル。

⑦笏=しゃく　聖徳太子の像に見られる、手に持つ儀礼用の板。元の読みは「こつ」。「尺」からこちらに転用される事が有ります。

⑧尉と姥=じょうとうば　翁の面と老女の面の事です。「尉」は昔の官名で、「丞」から来ました。

⑨骰子=さい　さいころの事です。元は「とうし」と読み、「賽」又は「采」から来ました。

①一齣=ひとこま　「齣」は本来戯曲の一場面の事で、「せき」と読みます。辞書には「小間」の意味かもしれないとの事です。

　囲碁・将棋、能・狂言他、専門分野、限られた業界で良く使われる言葉等はそのまま読みを憶えた方が良いかもしれません。
　使用頻度が高いと、それなりに世間で通用する場合が多々有ります。「一目」（いちもく）「減反」（げんたん）　「漁師」（りょうし）「極道の妻たち」（ごくどうのおんなたち）等。但し、あまり自由に使われますと収拾がつかない事になりかねません。
　やっぱり勝手読みです。

木村（きむら） 謹治（きんじ）

対面リーディングの実際 58

― 四つ仮名 ―

いきなりですが、次の漢字の読みを括弧内に記入してください。

鼻血　（　　）　稲妻　（　　）
間近　（　　）　地面　（　　）
小包　（　　）　融通　（　　）
図画　（　　）　世界中（　　）
痔　　（　　）　入知恵（　　）

書けましたか。「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」、どちらが正しいのか迷うことはありませんでしたか。

試しにワープロで変換してみましょう。「はなじ」「はなぢ」いずれでも正しく変換できます。いろんな文字を試してください。

ワープロで変換できるので、「じ ⇔ ぢ」「ず ⇔ づ」どちらも正解と思われがちですが、規則があります。

鼻血（はなぢ）　稲妻（いなずま）
間近（まぢか）　地面（じめん）
小包（こづつみ）融通（ゆうずう）
図画（ずが）　世界中（せかいじゅう）
痔　（じ）　入知恵（いれぢえ）

と、答えを書きましたが、どちらを書いてもよい語があります。実は日本語は非常に面白い言語で、表記に関しては世界一ゆるいのです。特に、人名表記のゆるさには定評があって、「太郎」と書いて「はなこ」と読ませても問題ないというゆるさです。（戸籍法には読み仮名に関する規定がないため、常用漢字か人名用漢字を使っていれば「読み仮名」は自由に決めることができます）

そんなわけで、例えば「稲妻」は「いなずま／いなづま」どちらも許容されています。

それでは書かれた文字を読み上げてみましょう。「じ」「ぢ」「ず」「づ」をうまく読み分けましたか。そんなの無理ですね。

この4つの「じ」「ぢ」「ず」「づ」という仮名をまとめて「四つ仮名」と呼びます。

実はこの四つ仮名は、もともとはぜんぶ違う発音でした。

「ファシバフィデヨシ」「ツァツァノファファミヤマモツァヤニツァヤゲドモ」。歯が無い状態で喋っているわけではありません。前者は戦国武将「羽柴秀吉」の16世紀当時の読み、後者は『万葉集』に収められている柿本人麻呂の歌「小竹（ささ）の葉は深山（みやま）もさやに乱る（さやげ）とも～」の、平安時代はじめ頃の読みです。

録音機もない古代の発音がどうして分かるのか不思議ですね。

釘貫亨著『日本語の発音はどう変わってきたか』（中公新書）の解説を藤井勉氏は以下のように書いています。

昔の発音を知る重要な資料となったのは、「万葉仮名」と呼ばれる、まだ平仮名も片仮名もなかった奈良時代に使われていた仮名である。万葉仮名は音節に漢字を当て、日本語を書き表せるようにしている。たとえば『万葉集』の和歌「二上（ふたがみ）の　山に籠れる　霍公鳥（ほととぎす）　今も鳴かぬか　君に聞かせむ」は、「敷多我美能　夜麻尓許母礼流　保等登藝須　伊麻母奈加奴香　伎美尓伎可勢牟」と表される。こうした文字の用例が研究者たちによって検証されていき、当時のハ行音は「パピプペポ」に近くて後に「ファ・フィ」のような音になったこと、サ音は「ツァ」に近かったことや、母音が5音ではなく8音であった可能性が浮かび上がる。

万葉仮名以外にも、仏教の経典の注釈書や、室町時代にヨーロッパの宣教師たちが作成した日本語の文法書・辞典など、ヒントとなる

各時代の文献が後世に残されている。中には、16世紀前半のなぞなぞで「母には二回会ったけれども父には一度も会わなかったもの、これ何だ？」の答えが「くちびる」であることから、母は当時「ファファ」とくちびるを二度合わせる発音だったことが証明されるなんて、よくできた話もある。

とはいえ復元の基本となるのは、文字と音の対応関係を調べ上げて法則を見つける、地道な知識の積み重ねだ。本書で再現される復元の過程においては、素人にはとっつきにくい専門的な話も少なくない。だが普段気になっていた日本語の謎が解き明かされる醍醐味も、そこには同居している。

たとえば、使い分けを迷ってしまいがちな「じ/ぢ」と「ず/づ」。「四つ仮名」と呼ばれるこれらの仮名は、元は発音も違っていたという。鎌倉時代まで「ヂ」は「ディ」、「ヅ」は「ドゥ」に近かったのが、室町時代中期には区別が曖昧となる。それでも軽い鼻音の違いは残っていたものの、元禄時代（17世紀終わり）頃には「ぢ」は「じ」、「づ」は「ず」と同じ発音に落ち着いたことが本書で証明されていく。（以上引用終わり）

このように時代によって、だいぶ違う日本語の発音。発音が復元できる最古の時代である奈良時代から現代語と大体同じになる18世紀後半まで、約1000年に渡るその変化の歴史を紐解いた一冊が、『日本語の発音はどう変わってきたか』（中公新書）です。

大辞林は、もともと破裂音だった「ぢ」「づ」が破擦音化して、もともと摩擦音だった「じ」「ず」と混乱するようになったと書いています。

古くは、「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」は、それぞれ異なる音（「じ」「ず」は摩擦音の[ʒi]［zu]、「ぢ」「づ」は破裂音の[di]［du]）で発音されたが、室町末期になると「ぢ」「づ」が破擦音化して[dʒi]［dzu]となり、以後「じ」「ず」との混乱がみられるようになり、17世紀末には現代と同じようになった。

室町末期のキリシタン資料のローマ字表記では、多く

ジ ji　ヂ　gi

ズ zu　ヅ zzu

と書いて区別されているが、次の記述によれば、その頃の京都でもすでに混同されることがあったようである。

都の言葉遣いが最もすぐれてゐて言葉も発音法もそれを真似るべきであるけれど、都の人々も、ある種の音節を発音するのに少し欠点を持ってゐることは免れない。

……例へば、Fonji（本寺）の代わりにFongi（ほんぢ)、Jinen（自然）の代わりにGinen（ぢねん）といひ、又 Giban（地盤）の代わりに Jiban（じばん)、Giquini（直に）の代わりに Jiquini（じきに）といい。……

又 Zu（ズ）の音節の代わりに Dzu（ヅ）を発音し、又 反対に Dzu（ヅ）の代わりにZu（ズ）といふ。例へば、Midzu（水）の代わりにMizu（みず)、……

このような四つ仮名、ジとヂ、ズとヅの混同も、江戸初期のうちに一般化して区別がつかなくなったようである。（現代日本語学入門／萩野綱男 明治書院）

そう言えば「わ/は」と「え/へ」「を/お」についても不思議ですね。どちらも同じ発音なので不要なんじゃないかと思いませんか。また、調べてみますね。

現在では、この二音に「じ」と「づ」の文字を与えました。にもかかわらず、「ぢ」「づ」の文字も残しました。そして「現代仮名遣い」でこんな決まりを作りました。

１．「じ・ぢ」「ず・づ」の使い分けのルールについて

1986年に内閣告示として出された『現代仮名遣い（げんだいかなづかい)』という文書を簡単にまとめると、以下の５つになります。

①「ぢ」「づ」は原則として使用しないこと
②「ちぢむ」「つづく」のように同音が続いた場合に生じるものは、例外とすること
③「はなぢ」のように２つの言葉の連合（連濁）によって生じるものは、例外とすること
④「せかいじ（ぢ）ゅう」のように、２語に

分解すると意味が連想しにくいものは、「じ・ぢ」「ず・づ」のどちらで書いても良い
⑤漢字の読み方がもともと濁っているもので、上記「②、③」に当てはまらないものは、そのまま「じ」「ず」を使用すること

ではそれぞれのルールについて詳しく解説していきます。

①「ぢ」「づ」は原則として使用しないこと

原則として「ぢ」「づ」ではなく、「じ」「ず」の方を優先して使用することが定められています。

ただ躓くのように「躓」は本来「つまず（く）」という読み方しかできませんが、「つまずく」ではなく、「つまづく」についても特に間違いではないとされている例もあります。

これは「つまづく」と間違える人が増えて、それが一般的にも広く定着したために、「つまずく」「つまづく」のどちらも正しいことにしよう！となったものだと考えられます。

②同音が続いた場合に生じるものは、例外とすること

「同音が続いた場合に生じるものは、例外とすること」というのは、①の原則として「ぢ」「づ」を使用しないこと、が当てはまらなくなるということです。

つまり同音が続いた場合に生じるものについては、“そのまま「ぢ」「づ」を使用する”ということです。

例えば、「縮む（ちぢむ）」「続く（つづく）」のように同音が続いている場合には、①の例外とするため、①に従って「ちじむ」「つずく」とする必要はありません。

なので「縮む（ちじむ）」「続く（つずく）」と書いてしまうと間違いになります。

③２つの言葉の連合（連濁）によって生じるものは、例外とすること

ここでの「ぢ」「づ」読みというのは、連濁（れんだく）という現象によって生じるものになります。

連濁というのは、２つの語が結びついて１つの語になるときに、発音しやすくするために、後ろの語の語頭が清音から濁音に変化する現象のことを言います。

鼻血であれば、鼻（はな）＋血（ち）なので、血（後ろの語）の語頭である清音の「ち」が濁音の「ぢ」に変化します。

なので「鼻血（はなじ）」と書いてしまうと間違いになります。

④２語に分解すると意味が連想しにくいものは、「じ・ぢ」「ず・づ」のどちらでも良い

例えば、世界中は「地球上のあらゆる場所／あらゆる人間社会」の意味があり、世界 ＋ 中 と２語に分解したときに、その意味が連想しにくいです。

このように２語に分解すると意味が連想しにくいものについては、それぞれ「じ」「ず」を用いることを本則として、「ぢ・じ」「づ・ず」のどちらで書いても良いとされています。

つまり基本的には「じ」「ず」を使用しますが、「ぢ」「づ」を使用しても間違いではありませ。

なので世界中であれば、基本的には「世界中（せかいじゅう）」と書きますが、「世界中（せかいぢゅう）」と書いても特に間違いではありません。

他にも稲妻（いなずま）であれば、「空中電気の放電によって生じる電光」の意味があり、稲 ＋ 妻 と２語に分解すると意味を連想しにくいですよね。

なので稲妻も世界中と同様に、基本的には「いなずま」と書きますが、「いなづま」と書いても特に間違いではありません。

ただし、人妻（ひとづま）であれば「他人の妻」の意味があり、人 ＋ 妻 と２語に分解しても意味が連想しやすいものなので、そのまま「づ」（「ず」は間違い）のみを用います。

⑤漢字の読み方がもともと濁っているものは、そのまま「じ」「ず」を使用すること

正確には、漢字の読み方がもともと濁っているもので、「②、③」に当てはまらないものは、そのまま「じ」「ず」を使用することで、②や③は、例外とすること。

「地」は「じ」、「図」は「ず」のように、これらの漢字はもともと濁った読み方を持っていて、上記「②、③」に当てはまらないものであれば、そのまま「じ」「ず」を使用するということになります。

例えば、⑤には「地面（じめん）」「布地（ぬのじ）」「略図（りゃくず）」などの言葉が挙げられます。

つまり⑤というのは簡単で、「地（じ）」「図（ず）」のように、もともとその漢字が持っている「じ」「ず」の読み方を使用しましょう、というだけの話です。

なので「地面（ぢめん）」「布地（ぬのぢ）」「略図（りゃくづ）」と書き表すのは間違いになります。

以上が「じ・ぢ」と「ず・づ」の使い分けのルールをわかりやすく解説！でした。

この「四つ仮名」ですが、驚くことに現在も発音として区別されている地域があります。

一番有名なのが高知県の一部地域。その地域の方言では発音としての区別が今もされているんです（厳密には九州、奈良、山梨の一部の地域にも残っているそうです）。

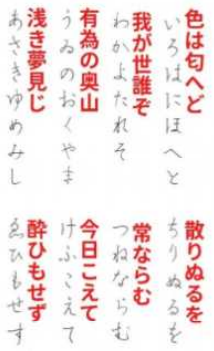
たとえば「富士（フジ）」「藤（フヂ）」「鈴（スズ）」「水（ミヅ）」という具合に発音を使い分けています。

それとは真逆で、東北方言や雲伯方言などでは、四つ仮名が混同され、「ジ・ズ・ヂ・ヅ」の全てが同音になっています、これを「一つ仮名弁」と呼びます。

しかし、伝統的な方言を話す老年層の世代が下ると共通語の影響でほとんどの地域が「二つ仮名弁」に変わっていきました。

では清音の方はどうなっていたでしょうか。現在には44音しか清音がないのに、奈良時代には、６１も清音がありました。平安時代になると、現在の状態に一挙に近づきます。

「上代特殊仮名遣い」で書き分けられていた清音がほとんどなくなったからです。「いろは歌」のできた10世紀の中頃には47の清音になっています。後に「いろは歌」の最後に「ん」を付けて「いろは四十八字」と言うこともありましすが、もともとの「いろは歌」には撥音の「ん」は入っていません。当時存在したすべての清音を１回だけ使って作った歌なので。



さらに平安時代の末期には「を」と「お」も統合されて、一つの音になり、清音は、４６音。まだ「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」の音の区別があります。

でも鎌倉時代の末頃には、「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」も、それぞれ統合されて一音になり、あわせて２音減少し、現在と同じ４４音になりました。清音の数はそれから現在までの700年ぐらいの間、変化していません。もうこれ以上、減らせない限界点に達しているのかもしれません。

濁音の方も、平安時代になると、「上代特殊仮名遣い」で区別されていた音がなくなります。ですから、奈良時代には２７音あった濁音が、20音に減りました。その後は安定していましたが、江戸時代になって、今述べたように「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」が、それぞれ統合されて、現在と同じ18音になったわけです。

今回の記事は対面リーディングにはあまり役に立たなかったですね。結論を言えば、現在では「じ」「ぢ」、「ず」「づ」の発音の差はないということになります。

ひょっとすると将来、四つ仮名の表記も統合されるかも知れませんよ。言葉の成り立ちを学ぶのは楽しいですね。

参考文献

- 疑問雑学　https://zatugaku-gimonn.com/entry9529.html
- Real Sound　https://realsound.jp/book/2023/04/post-1303212.html
- Wikipedia

レポーター：伊東（いとう） 晴子（はるこ）

ボナ・フォルケッタ（Buona Forchetta）

【所在地】　大阪市西区土佐堀１丁目1-6
【電話番号】　06-6443-0888
【行き方】　情文本館前の交差点を渡り左へ50歩ほど。APAホテルの真裏あたり
【営業時間】　昼：火～金 11:30-13:30　／　夜：18:00～
【定休日】　月曜日、日曜祝日
【URL】　食べログ、ホットペッパーなどをご参照ください

情文本館から近い昼食場所の第二弾。本館前の横断歩道を北へ渡り、橋の手前の道を左へ進んで３軒ほど。位置としては、APAホテルのちょうど後ろ側です。

赤い扉を開けて入ると、カウンターとテーブル席、階段を下りると地下にもテーブル席があります。一人で行くと、たいていはカウンター席になりますが、背が低い私には、テーブルがちょっと高い…。

店内にはイタリアのラジオ放送が流れていて、明るい歌声がかの国らしい雰囲気を盛り上げています。マスターと女性二人で切り盛りされるお店は、開店してしばらくすると満席になってしまいます。お昼どきは早めに行くのがおすすめ。

20年ほど前から営業されている本格的なイタリアンで、ボランティアの間でもファンが多いお店です。私も最初は先輩に連れて行ってもらい、その後、お店の名前が覚えられないまま、何度も通っていましたが、今回この記事を書くに際してさすがに気になり、たずねてみました。

「フォルケッタ」はイタリア語でフォークのことで「良いフォーク」とは食いしん坊のことだそうです。ネットでは「健啖家」という訳もありましたが、これだと「大食漢」（日国大、広辞苑等）。おいしいもの好き、という意味で「食いしん坊」がいいですね。夜も行ってみたいのですが、まだ実現していません。

ランチの定番は、トマトベースのスパゲティと手延べ麺のクリームベースが各１種類（1000円）ですが、先日は珍しくリゾットが！早速並んだのに、前の女性が満席で断られてしまいました。カウンターがいっぱいで断られたのかもしれないと思った彼女、あきらめずに「２人でもダメかしら？」と後ろの私に声をかけてきました。そこで私が改めて「２人ですけど」と尋ねましたが、残念ながら本当に満席だったらしく、食いしん坊どうしの相席はかないませんでした。残念。

脱線しました。ランチにはスープとグリーンサラダ、バゲットがつきます。シンプルなグリーンサラダにはシンプルなオリーブオイルのドレッシング。スープは冷たいコーンスープ、冬は確か具沢山のミネストローネ。いずれもとってもおいしいです。

この日は初めて手打ち麺を注文。クリーム入りボロネーゼは、ひき肉のソースに手打ちの平たい麺がよくからみ、黒コショウがいい仕事をしていました。

思い切ってコーヒー（200円）とデザートのチョコレートケーキ（300円）。プラムがまるごと１個添えられ、甘味と酸味、色の組み合わせも美しく、夢見心地で堪能しました。

皆さまもいつかぜひ。

おしらせ

・ニポラチャンネルのご案内

YouTubeで配信しているニポラチャンネルは「見えない方、見えにくい方のためのチャンネル」です。iPhoneの基本設定や基本操作、アプリなどを始め、拡大読書機などの関連機器、グッズの使い方の説明、白杖の使い方などの内容を随時配信しています。

当館での活動の参考にもなると思いますので、是非ご覧ください。

・対面リーディング通信などのバックナンバーをご利用ください

情報文化センターのホームページでは、対面リーディング通信などの刊行物のバックナンバーを閲覧できます。トップページの「刊行物」をクリックし、ご希望の刊行物をクリックすると、号数を選ぶ画面に移ります。ここでご希望の号数をクリックしてください。

タイトルそれぞれに閲覧できる数は違いますが、対面リーディング通信は2012年10月号以降を読むことが出来ます。どうぞご利用ください。

・オープンデーについて

毎月１回、第２土曜日（月によっては第３土曜日）に開催している「オープンデー」は、どなたでも参加していただける館内見学会です。時間は13時30分から約２時間で、普段はご覧頂けない製作部門などへもご案内します。参加費用は無料です。

参加ご希望の方は対面担当、または総務係（06-6441-0015）までご予約をお願いいたします。館内見学をしたことがないという方はもちろん、お知り合いで情報文化センターの活動にご興味のある方がおられましたら是非、ご案内ください。

この夏は本当に厳しい暑さでした。夏の疲れが残ったまま朝晩の気温差が大きい秋になると「秋バテ」になりやすいそうです。体調を整えて、良い季節を楽しみたいですね。（F）

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6136-7704（対面専用）
06-6441-0039（サービス部）